

番号	2180829	呼	ヨミ カワボタル		
		称	カワボタル		
出典	書名・誌名 (4 巻 2 号/通巻 38 号) 民間伝承		執筆者 柳田 國男		発行所 民間伝承の会
	論文名 (16) ~ () 頁 妖怪名彙 (五) 掲載箇所 (16) ~ () 頁		話者・資料 (引用) (『利根川図誌』 安政5年)		発行年月日 (西暦) S13 年 11 月 1 日 (1938) 年
地域 (旧名)	千葉 都・道 市 区・町 印旛沼 府・県 郡 村 () () () ()				採集年月日
要約	印旛沼のカワボタルは、夜に出るので火に見えたという。これは越後のミノムシと同じで、小雨の降る晩などに歩いてみると火が現れて蓑の端にくっつく、払えば払うほど全身を包むが熱くはないという怪だろう。				
ミノムシ 越後では評判の路の傍で或は颯のしわざともいふ。小雨の降る晩などに火が現はれて蓑の端にくっつき、拂へば拂ふほど全身を包む。但し熱くはないといふ(西頭城郡土諸稿二)信濃川の流域には此話が多く、或はミノボシとも謂ふ。多人数であるいて居ても一人だけに此事があり、他の者の眼には見えない(井上氏妖怪學四七九頁)雨の滴が火の子のやうに見えるのだともいふ(三條南郷談)。越前坂井郡でも雨の晩に野路を行くとき、笠の雫の大きいのが正面に垂れ下り、手で拂はうとすると脇へのき、やがて又大きい水玉が下り、次第に數を増して眼をくらます。狸のしわざといひ、大工と石屋とは附かぬといふのが珍らしい(南越民俗二)。秋田縣の仙北地方で蓑蟲といふのは、寒い晴れた日の早天に、蓑や被り物の端につけてきら／＼光るもので、幾ら拂つても盡きないといふから、是は火では無い(旅傳、七卷五號)。利根川圖誌に印旛沼のカハボタルと謂つて居るのは、是は夜中に出るので火に見えた。是も越後のミノムシと同じものだらうと謂つて居る。」					